

第3章 葛藤から親交へ：親との新たな関係

Chapter 3 From Conflict to Companionship: A new Relationship with Parents (pp.49-82)

Arnett, J.J. (2014). *Emerging Adulthood: The winding road from the late teens through the twenties*. (2ed.) Oxford University Press.

和洋女子大学 池田 幸恭

※下線部は加筆

“私が14歳の少年であったとき、父はあまりにも無知だったので近くにいることに耐えられなかった。しかし、21歳になったとき、父が7年間でどれほど多くのことを学んでいたのかに驚かされた。”一世紀前のマーク・トゥエインによるこの言葉は、今日では青年期から成人形成期(emerging adulthood)にかけての親との関係に適当なものとして変化した。親との葛藤は青年期に大きくなり、青年はしばしば自分たちの親を無知でひどいものとみなす。しかし、成人形成期をとおしてほとんどの人が、単に親だけでなく人間として、自分たちの親をととても共感できて優しく善良であると思うようになる。

親は子どもが青年から成人形成期に入ることに応じて変化する。多くの部分で、親は成人形成期の子ども(emerging adults)の成熟の進行に合わせて、青年期の頃とは違ったように接する。まさに成人形成期の子が親を単に親だけでなく人間としてみなすようになるにつれて、親もまた子を単に子だけでなく人間としてみなすようになる。このような両者の認識の変化によって、親と成人形成期の子どもは、対等に近い新たな関係を構築することになるのである。

この変化は突然に生じるのではなく、成人形成期をとおして次第に生じてくる。もはや青年ではないがまだ十分な成人でもないという狭間の感覚(the felling of in-betweenness)は、非常にたくさんの成人形成期にある者(emerging adults)が抱いており、親との関係における変化によって生じてくる。第1章で論じたように、成人形成期にある人は、自分自身への責任(accepting responsibility for yourself)、自立した決定(making independent decisions)、経済的自立(becoming financially independent)という成人になるための大きな3つの隅石を見いだす。これらの3つの基準はどれも自立、特に親からの自立を意味する。

自分自身への責任：以前は親によって引き受けてもらっていた責任を引き取り、もはや自分の失敗した結果の責任を親に肩代わりしてもらうことを期待しないことである。

自立した決定：自分の人生の重大な決定をもはや親に委ねないことである。

経済的自立：自分の勘定のいくらかあるいはすべてを親に払ってもらうことがもはやないことである。

成人形成期の子はこれら3点すべてで自立を達成する途上にあるが、狭間にいるためにまだ達成はしていない。成人形成期の子どもは、特に金銭面では十分な成人になってからの継続は期待しないが、助言や感情的なサポートについて親にまだ頼っている。

(pp.49-50)

親密さ、調和、たくさんの時間 (Closeness and Harmony, Most of the Time)

成人形成期では親からより自立していくが、アメリカでは 20 代をとおして親との親密なつながりを継続している。(p.50)

※18 歳から 29 歳までの半数以上(55%)が、自分たちの親と“毎日あるいはほぼ毎日”連絡を取っていると回答している(Arnett & Schwab, 2012)。成人形成期のより若い人は親とより連絡を取っていると回答しており、26 歳から 29 歳までの人でも 51%が毎日連絡を取っていた。

成人形成期における親との連絡頻度は、技術(PC, 携帯電話, Facebook, iPod, iPad など)による安価や手軽さだけによるものではない。成人形成期における親との関係の典型的な特徴である親密さと調和を反映している。

※成人形成期(18-20 歳)の 75%が、10 代の中頃よりも現在の親との関係がとても良好であると回答している(Arnett & Schwab, 2012)。3 分の 2(66%)の親も同様に回答している(Arnett & Schwab, 2013)。(p.51)

子どもが 15 歳だった頃と現在を比較するように尋ねたところ、親の 80%以上は子どもとより成人としての会話を持つようになったと回答しており、80%近くは一緒に時間をより楽しんでおり、より葛藤がみられると回答したのはわずか 16%であった(**Table 3.1**)。(p.51)

成人形成期における親子関係は全体的に非常に良好であるが、家族関係は“いつまでも幸せに暮らしました(happily-ever-after)”とはいかない複雑なものである。実際の成人形成期の子どもにとっては、親は少し親密すぎるのである。18 歳から 29 歳までの 30%が、実際の望んでいる以上に親が自分の生活に関わってくると回答している(Arnett & Schwab, 2012)。(p.52)

※同じ質問に、ラテン系は 41%, アフリカ系は 39%, 白人系は 24%があてはまるとしている。(p.52)

ラテン系とアフリカ系アメリカ人における家族の親密さと相互サポートという文化的伝統は、多くの成人形成期にある子どもたちの目からは障害に思えるが、これらは恩恵でもある。(p.52)

Table 3.1 15 歳から成人形成期までの変化に関する親の回答 (Arnett & Schwab, 2013)

子どもが 15 歳であったときから、あなたと子どもの関係はどのように変わりましたか。	肯定回答率(%)
私たちは大人としての会話をより持っている	86
私たちは一緒に時間をより楽しんでいる	78
子どもは私のことをより尊敬している	71
私たちはより友だちのようになった	55
子どもは私のことを親としてよりも人間として理解している	49
私たちは親しいとはいえない	20
現在の私たちにはより葛藤がみられる	16

家を出ること、家に戻ること、家に留まること (Moving Out, Moving Back In, Staying Home)

家を出る適切なタイミングに関する文化的な慣習は、世界で大きく異なっている。北ヨーロッパでは、18歳や19歳には家を出る。南ヨーロッパでは、20代後半から30代前半頃まで家に留まる。地方アジアでは、家族を離れることなく、結婚相手も一緒に住むことがある。アメリカでは、18歳や19歳が家を出る典型的な年齢であるが、全員がその年齢に家を出るわけではなく、家を出た人も何人かはまた戻ってくる。(p.52)

家を出ること (Moving Out)

ほとんどのアメリカ人は、大学に通うため、あるいは単に自立するために、18歳や19歳に初めて親元の家から出る(Goldscheider & Goldscheider, 1999)。家を出ることは、より自由になることを意味するが、責任もまた大きくなる。成人形成期にある子どもたちは、自身の世帯を持つことや支払いをしていくことが大変なことであると気がつくであろう。選択や食料品の買い物、トイレ掃除など日常生活で面倒だが必要な細々したことを親が世話してくれなくなったことを寂しく思うかもしれない。しかしながら、成人形成期の子どもにとって、親からのぞきこまれることなく、自分たちの生活をコントロールしていると実感できる責任を担うことは大切なことであるといえる。(p.53)

成人形成期になることで、我慢できない家庭環境から自由になる機会を得ようとする。青年は経済的にも法律的にも親に依存しているため、十分な選択はなく、家で生活することになる。親が極度の虐待やネグレクトをおこなっているのではない限り、子どもは法律的に親元に留まることを求められる。(p.55)

どちらかといえば健康な家庭環境で育った成人形成期の子どもにとっても、家を離れることはしばしば親との関係をより良好にする。親も子も、一緒にいる時間を以前より大切に思い、お互いに連絡を取ろうと努力する。(p.55)

成人形成期の子どもは、自分の親に対する愛着の強さを発見して驚くことが時々ある。家にいた間は日常生活の中でそのことには気がつかなかったり、たくさんの葛藤や一緒にいることで生じる憤りに親への愛情が埋もれてきたりしたのかもしれない。(pp.55-56)

親もまた子どもが家を出ることで、しばしば喪失感を抱く。Arnett & Schwab(2013)によれば、大多数の親(84%)は家を出た子どもに会えなくて寂しいと答えている。それにもかかわらず、成人形成期の子どもが家を出ることは、結果として様々な面でよいことであるとも親は思っている(Table 3.2)。(p.56)

家に戻ること (Moving Back In)

1920年代には家に戻る割合は20%であった(Goldscheider & Goldscheider, 1999)。現在では、家を出る主な理由であった大学や自立の途上で、家に戻ってくることは非常に一般的になっており、成人形成期の子どもの40%以上が経験している。(pp.56-57)

Table 3.2 子どもが家を出るときに関する親の回答 (Arnett & Schwab, 2013)

子どもがあなたの家を離れて暮らしているとすると、子どもが家を離れることについてあなたはどのように感じますか。	肯定回答率(%)
子どもが自立し始めたときと幸せになる	90
子どもと会えなくて寂しい	84
配偶者や恋人との時間をもっと持つことを楽しむ	61
自分自身の時間をもっと持つことができると歓迎する	60
子どもはまだ自立の準備ができていないのではないかと心配になる	37
子どもとの葛藤が少なくなると安心する	31
子どもと感情的に親しい関係ではないと感じる	27

成人形成期の子どもと親は、成長した子どもが“巣に戻る”にたくさんの反応を示す。ほとんどの場合、家に戻ることは歓迎され、その移行は容易に進む。(p.57)

成人形成期の子どもが家で暮らす場合、親の生活は様々な面で確かに崩れるが、親は負担よりも恩恵を感じやすい。実際、子どもが家に戻ってくることを親はより好意的に受けとめ、自分たちの関係を強め、より親密にすると考えている(**Table 3.3**)。(p.57)

家に戻ることは不安定な移行となる場合もある。世話をしたり責任を負ったりする子どもがいなくなったことで、親はその巣をすべて自分のものとして楽しんでいたかもしれない。(p.58)

多くの成人形成期の子どもにとって、家に戻るによってアンビバレンスが生じることになる。子どもたちは親が提供してくれるサポートに感謝すると同時に、依存した子どもという従属する役割に戻ることに憤ることになる。(p.59)

Table 3.3 成長した子どもが家にいることに関する親の回答 (Arnett & Schwab, 2013)

子どもが家で暮らしている、あるいは家に戻ってきたとすると、子どもと一緒に暮らすことはあなたに何をもたらしますか。	肯定回答率(%)
子どもと感情的により親密になると感じる	67
子どもとより親交を持つ	66
子どもは家庭内の役目を助けてくれる	62
経済的なストレスをもっと持つことになる	40
子どもについてより心配になる	40
自分自身の時間が少なくなる	29
配偶者や恋人との性的な自由が少なくなる	27
子どもとの葛藤が増えることになる	25

家に留まること (Staying Home)

成人形成期の子どもが親元に留まりながらも、うまくやっていく家族も多くある。(p.59)

親による制約にもかかわらず、少数派の人種における成人形成期の子どもは、家で暮らすことは望ましいことであるとみなすことが多い。このことはもしかしたら自分たちの文化で学んできた家族の親密さという価値によるものかもしれない。しかしながら、それぞれの少数派の人々にも、たくさんの多様性があり、少数派の人種における多くの成人形成期の子どもも大学や自立という白人系と同様の理由で家を去っている(Goldscheider & Goldscheider, 1999)。

親元で暮らしていながらも成人形成期にあることは可能であろうか。成人形成期が親に依存しながらも新たな家族の義務を引き受ける時期であるとすれば、家で暮らすことは親に依存することに留まらせ、成人形成期よりも青年期に留まらせるのではないだろうか。家で暮らす場合には家を出ている場合よりも、親に依存することになるのは確かに正しい。しかしながら、教育期間が長期化し結婚や親になる年齢も遅くなっているという成人形成期の人口動態は、家を出た人と同様に家にいる人にもあてはまる。実際に、既述のとおり18歳24歳までの実家で暮らしている人は、家を出た同年代よりも学校に入学している。

特にアメリカでは、アイデンティティ探求(identity explorations), 不安定さ (instability), 自己への専心 (self-focus), 狭間の感覚 (feeling in-between), 可能性の感覚 (a sense of possibilities)を成人形成期の5つの特徴としてみなす場合には、家で暮らしている若者が成人形成期にあてはまらないという理由はない。家で暮らしながらも、愛することと働くことに関する様々な可能性を探求することは可能であるのだ。

(p.61)

家に戻ってくる成人形成期の子どもと同様に、家で暮らしている子どもも青年期に比べて親から自律するようになる。子どもが何歳であろうと家にいる限りは子どもに目を光らせる義務があると感じる親もいるが、ほとんどの親は子どもが成人形成期に入ること、子どもたち自身に生活を任せたり干渉しなくなったりして新たな人生の段階に合わせていく。(pp.61-62)

親と子から対等に近い関係へ (From Parent and Child to Near-Equals)

青年期に比べて成人形成期になると関係はよりよくなる。(p.62)

成人形成期に成熟し自分自身をより成人であると感じるにつれて、親が人生をどのように考えているかをより理解することができるようになる。親は子どもの頃にあこがれた人格化された人物でも、青年期に軽蔑したダメな奴でもなく、自分たちと同じような美点と欠点の特徴を合わせ持つただの人間であることを認識する。(p.62)

人によっては、親も人間であるとみなすという新たな感覚によって、10代の頃に親へしてきたことに良心の呵責を抱くことになる。(p.62)

またある人にとっては、親も人間だと学ぶことは迷いから覚めることにもなる。(p.62)

親もまた子どもの理解やかかわりを変えていく。子どもの言動を監視することや家のルールを守らせるという親の役割は少なくなり、その結果より落ち着いて好意的に子どもとの関係を持つことができる。(p.64)

成人形成期の子どもと親の変化によって、以前よりも開かれていて相互に尊敬の念を抱くような新たな親密性を築くことができる(Arnett & Fishel, 2013)。(p.64)

すべての成人形成期の子どもが親との対等に近い関係に至るわけではない。(p.65)

親が子どもを自由にすることに気が進まないことは、成人形成期の子ども自身が成人の生活の責任を取ることに気が進まないことを反映している場合もある。(p.65)

ほとんどの場合で、成人形成期の子どもと親の両方が対等に近い新たな関係に合わせることができ、それを望んでもいる。(p.65)

親はかかわりすぎているのか (Are Parents Too Involved ?)

親と18歳から29歳までの子どもは、以前の世代よりも親密になっている(Taylor & Keeter, 2010)。このことの一因には、結婚年齢の上昇もあるといえる。かつて若者は、主な連れ合いで最も親密な相手となる配偶者や長く付き合う恋人をみついていた。現在は、20代後半や30代前半になっても“ソウルメイト”を見つけることができない人がほとんどであり、かつてに比べて、経済面だけでなく感情面でも20代の間は親に頼っている。(p.65)

※親子関係に関する考え方の変化(親が仲間や友だちのように親しくなり、たくさんの時間とエネルギーを子どもにかけることができる)も、この親密さの理由の一つといえる。(pp.65-66)

この親密さは成人形成期の子どもからも、親からも歓迎されている。(p.66)

※あなたの楽しみは何ですかという質問に対して、TV鑑賞(82%)、旅行(79%)、配偶者や恋人との関係(75%)さえも超えて、86%が“18歳から29歳までの子どもとの関係”と答えている(Arnett & Schwab, 2013)。(p.66)

20代には親のサポートを求めて必要としている成人形成期の子どもがほとんどである。成人形成期で取り組まれることのほとんどは、ヘリコプターペアレントの侵入の被害を受けることよりも、親の愛情とサポートを必要としながらも当てにすることができないことである。(p.67)

お金こそほとんどの葛藤の根である (Money Is the Root of Most Conflict)

今日、成長にどのくらいの時間がかかるかを示す主な印のひとつは、経済的自立を達成するのにかかる時間である(p.67)

親は、子どもの頃に自分たちの親から受けてきた以上の経済的サポートを子どもへ提供していると回答している(Figure 3.1)。(p.68)

成人形成期の子どもと親の関係におけるたくさんのポジティブな特徴にもかかわらず、お金はバラの棘といえる。実際に、成人形成期の子どもと親の争いの原因にお金があげられている(Table 3.4)。(p.69)

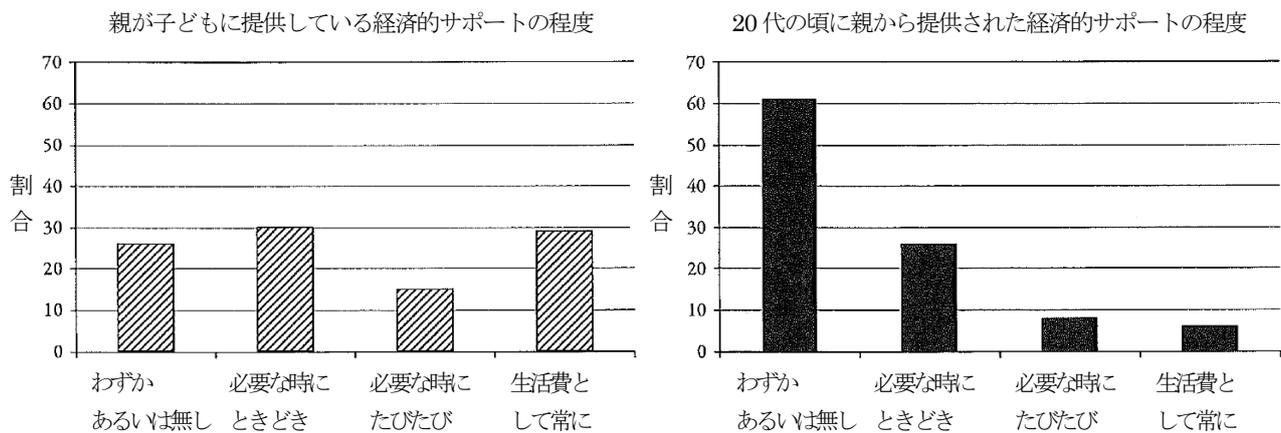


Figure 3.1 経済的サポートに関する親の回答 (Arnett & Schwab, 2013)

Table 3.4 成人形成期の子どもと親の葛藤の原因 (Arnett & Schwab, 2013)

もしあるとすれば、現在の子どもの葛藤の主な話題は何ですか。	肯定回答率(%)
お金	42
子どもが自分の行為にいつも責任を取るわけでないこと	37
子どもの教育面	34
子どもの仕事面	33

成人形成期にある子どもと親の両方は、お金の問題で非常にたくさんのアンビバレンスを経験する。一方では、教育を継続するために、あるいは働いていたとしても十分なお金を得ることができないために、子どもが10代後半や20代前半のような親の経済的援助を必要としていることに気づく。しかし、経済的援助を受けることは自身の決定が親の支配下に置かれることになるため、成人形成期の子どもは親に依存することを好んではない。もう一方では、ほとんどの親は子どもが成人形成期の間は、経済的にサポートして教育上あるいは職業上の目標に到達することを援助することを望んでいる。しかし、リタイアの年齢が近づく中で自分たちの財産が排出されていると感じ、子どもにお金を与えることでその用途に言いたいことを言うためには決して高い出費ではないとも感じている。(p.69)

経済的問題は、恋人や失職、退学などよりも、親が息子や娘に抱く心配事や懸念の上位にあがっている(Table 3.5)。(p.70)

Table 3.5 親が成人形成期の子どもに抱く主な心配事や懸念 (Arnett & Schwab, 2013)

あなたが子どもに抱いている主な心配事や懸念は何ですか。	肯定回答率(%)
経済的問題	38
誤った恋人や配偶者を選ぶこと	28
失職 (Lack of work progress)	27
退学 (Lack of educational progress)	26

離婚による多様な遺産 (The Multiple Legacies of Divorce)

アメリカでも他のほとんどの文化と同様に、家庭生活の喜びを讃え、家族関係を理想とする長い伝統がある。“家庭のような場所はどこにもない”“家庭は心がある場所だ”そのような理想はあるが、家庭生活の現実は大きく異なっており、そこにいたいと思うのは非常に短くなる場合もしばしばある。成人形成期までに、家族を悩ませ、家族一人ひとりの人生行路を決定的に変えてしまうような危機を多くの人々が 1 つ以上は経験している。(pp.70-71)

※Arnett が 300 名におこなったインタビュー調査によれば、両親が職とお金を失うこと、親が怪我をしたり慢性疾患の被害を受けたりすること、親が若くして亡くなること、きょうだい事故で亡くなること、父親が収監されること、親が躁うつのような精神疾患となること、親がアルコール依存や薬物依存から抜け出せなくなることなどの家族の悲劇がみられた。(p.71)

全体的に、両親の離婚を経験することは、児童期、青年期、成人形成期における幅広い問題のリスクが増加することにつながる(Amato, 2007)。(p.71)

成人形成期の子どもの中でも、両親の離婚への衝撃と悲しみを伴う反応を思い出す人もいれば、離婚が家庭内の葛藤と緊張の日々に終結を最終的にもたらしたことから安堵や幸福感さえも伴う反応を思い出す人もいる。また、離婚がとても幼いときに起こったり両親が別居する中で育ったりしたことで、離婚の記憶が全くない人もいる。成人形成期に入ったり家を出たりした後の最近に両親が離婚したことで、日常生活ではわずかな影響しか受けなかった人もいる。(pp.71-72)

結局、離婚による遺産は唯一ではなく、離婚を経験した個人のパーソナリティをとおした様々な異なる状況に応じて、多様な遺産が存在する。(p.72)

負の遺産：悲劇としての離婚 (Negative Legacies: Divorce as Tragedy)

成人形成期の何人かの子どもにとって、両親の離婚は決して癒されることのない深い傷である。年を経ても、その痛みを鮮明に覚えており、成人形成期に自分たちが抱える問題の原因であると考えている。(p.72)

消えゆく父親 (The Fading Father)

離婚の後、子どもの生活における父親の役割は急激に消失することが多い。離婚していない家族でさえ、母親と比べると、子どもの生活において父親は重要でないことが多い。青年期までは、父親は家族の感情面の生活における欄外にしばしばあり、一組の学者にみられるような(as one pair of scholars puts it) “影の存在” となっている(Larson & Richards, 1994)。(p.73)

離婚した父親を許すことができるかどうかという問いは、離婚した家庭で育った成人形成期の子どもにとって鍵となる問題であり、解決するのは容易でない問題である。(p.74)

両親の離婚後に父親との関係が消えゆくことを経験してきた成人形成期の子どもたちは

かりではない。必ず週に父親を訪ねる時間を持ち、父親がまだ家にいたときよりも、一緒に話したり何かしたりする時間を多く過ごす人もいる。離婚後に母親ではなく父親と一緒に暮らして、現在は父親により親密さを感じている人もいる。離婚後には父親との関係がうまくいかなくても、成人形成期に和解するよう取り組む人もいる。それにもかかわらず、最も一般的なパターンとして、離婚した両親のいる成人形成期の子どもは離婚を悪い意味での父親との関係における重大な転機として思い出し、成人形成期にはアンビバレントな気持ちを抱き続けることがある。(p.75)

肯定的な遺産：安堵としての離婚 (Positive Legacies: Divorce as Relief)

両親の離婚は、葛藤やその対処が常に起こる不幸な家庭に替わる生活が安堵をもたらすことが多いという意味で、成人形成期の子どもたちの生活に肯定的な遺産を遺すことがある。さらに、成人形成期の子どもたちは親を人間としてみなすことで、両親が不幸な結婚から逃れたいと願っていることを理解し認めて、結婚を解消することで幸福を求めたいという親の願いを支援するようになる。それにもかかわらず、喪失感やいくらかのアンビバレンスが残りに、20代になり家を出て自分たちの自立した生活を築いた後でさえもふり返り、“一緒にいられなかったことはひどいことであった”と考えることも、成人形成期の子どもにはみられることがある。(p.77)

鍋の外：再婚による多様な遺産 (Out of the Frying Pan: The Multiple Legacies of Remarriage)

離婚と同様に、両親の再婚は、児童期から青年期において抑うつ、不安、学業成績の低下、行為の問題などの様々な否定的な結果との相関がみられている(Jeynes, 2007)。しかしながら、離婚と同様に、親の再婚は多くの子どもたちに起こり、そこでは様々な反応がみられる。親の再婚を純粋な熱狂と推奨を持って、再婚相手を好ましく価値ある者として説明する成人形成期の子どもたちもいる。(p.78)

より一般的には、義理の親と子どもの関係は、困難さや悪い感情を伴うものである(Jeynes, 2007)。様々な理由で、幸せな関係が実現するには不利な状況にある。義理の親は実際の親を立ち退かせて合法的に取って替わったような略奪者としてみなされるかもしれない。このことは、離婚前に義理の親と浮気をしていた場合には特にみられる。さらに、両親は寄りかかろうという子どもたちが逃げ込んでいたある種の幻想に、突然の終焉を再婚はもたらすことになる。(p.78)

義理の親と子どもの間の最大の問題は、義理の親の合法的な権威の程度である(Moore & Cartwright, 2005)。義理の親、特に父親は、まさに“本当の”父親のように、ルールを作ったり守らせたり、訓練させたりするなど、家庭内で権威的な役割を担うように強いられていると感じることがしばしばある。しかしながら、両者には相互的な愛情や愛着の歴史はなく、これまで述べたような理由による憤りや嫌われたりしている中で、子どもが青年期やそれに近い場合には特に、権威を發揮しようとする義理の親の試みはひどく反抗される。(p.79)

一般的には陰うつな義理の親子関係における希望の光として、成人形成期に至ることで児童期の関係からしばしば改善がみられることがある。実際の親の場合と同様に、もはや一緒に住んだり日常的につきあったりすることもなくなり、成人形成期には義理の親とうまくやっていくことがしばしばみられる。また、実際の親の場合と同様に、成人形成期の子どもが成熟するにつれて、単なる義理の親ではなく人間として、義理の親の違ったよい面に目が向くようになることもしばしばある。(p.79)

結論：両親の重要さは続く (Conclusion: The Enduring Importance of Parents)

親からの自立の開始は、アメリカ社会では成人形成期への鍵となる移行である。そのプロセスは青年期に始まるが、成人形成期に加速する。家を出た場合には、成人形成期の子どもは親との関係における力のバランスが劇的に移ることを経験する。もはや毎日必ず親に会うことはない。もはや親も、何を食べて、着て、いくらくらい使って、どのくらい飲酒しているかなど、日常生活の詳細を知ることはない。その代わりに、望むような頻度で親と会うことができるし、親に知ってもらいたいだけの範囲で自分たちの生活について話をするができる。その結果、家を出る前よりも親とうまくやっていけることになることが多い。親が知らないということが、争いの源になることはないといえる。

成人形成期には青年期よりも自立しているが、様々な面で親とより親密になる。権威としての親、依存と従属としての子どもという階層は消え去る。大抵の場合、長きにわたって共有してきた経験を基礎にしたお互いの愛情や相手への愛着が残る。親と子という厳密な役割としてではなく、一人の人間としてお互いを理解することを学ぶ。以前よりも広い範囲で、より開けて、より友人のように会話をする。それでも開放性や友人のような関係へ変容する程度には限界がある。うまくやっていける理由の一つには、成人形成期の子どもが親に話す時には自分たちの生活を編集しており、葛藤の源になりそうな情報は出さずに、親もあまり追及しないことを学んでいることがある。

両親の離婚を経験している場合には、その経験による遺産を再評価する時期に成人形成期はなる。疎遠になっていた親と和解に向かう人もいる。間違っていると思う親、多くは父親へつらさや憤りを感じ続ける人もいる。離婚や義理の親を新たな慈善の光とみなして、児童期や青年期よりも人間関係への洞察を得る人もいる。あらゆる場合で、親の離婚や再婚を経験した成人形成期の子どもにとって、これらの変化は自分のパーソナリティやアイデンティティ、親密な関係の結び方の形成につながった永続する痕跡であるのだ(第5章参照)。

両親が離婚したかどうか、育った家庭生活が幸福であったか不幸であったか、家に留まるか残るか、いずれの場合も、事実上すべての成人形成期の子どもにとって、親との関係には感情の蓄積がみられる。

※愛(love): 乳児期や児童期に戻ってその根がある。

感謝(gratitude): 成人形成期に獲得してきた新たな認識の観点によるものである。

受容(acceptance): 成人期の水準で新たにみられる親へのかかわりである。

恨み(resentment): いずれにしても親が自分を失敗させたと思込むことである。

幻滅(disillusionment): 隠されてきた親の欠点に気がつくことである。

警戒(wariness): 自分たちの生活へ親からの干渉を避けるように努力する。

つらい離婚の残余として率直な嫌悪もみられる。

(p.81)

成人形成期における親との関係には、これらの感情が混ざり合い、一緒になり、それらの感情は生涯で最も強く、ほぼいつもみられると考えられる。良い面でも悪い面でも、親は成人形成期となった人たちの人物というものを強力に形成してきたのである。(pp.81-82)

感想

①親との同居や一人暮らし、離婚と再婚による影響など、必要だが研究の少なかった問題を取りあげたことの意義は大きい。さらに、成人形成期にそれまでの親子関係の問題を乗り越えていくという視点は重要であると考え。

②主張の多くは、親との愛着と親からの自律の両方が大切であり親との関係は青年期以降も重要であり続ける(Santrock, 2012)といった、従来の親子関係研究と重なる印象を受けた。しかし、親子関係に関する諸理論との照合などはおこなわれておらず、どうすれば親子関係の問題を乗り越えることができるかについても不明瞭である。

参考 Santrock, J.W. (2012). *Adolescence* (14th ed.). McGraw-Hill.

③根拠としているデータの中心は、若者へのインタビューと Arnett & Schwab(2013)による調査結果であった。後者は、クラーク大学による18歳から29歳までの成人形成期の子どもを一人以上持つ親1,006名にインタビュー調査した結果である(携帯電話100名、固定電話406名、インターネット500名)。しかし、そのデータは度数のみであり、その回答も子どもが家を出た場合(Table 3.2)や家で暮らしている場合(Table 3.3)を想定させるものであることから、現実の親子関係と乖離している懸念もある。

なお、初版(2004)の第3章は“**From Conflict to Companionship: A new Relationship with Parents**” (pp.47-71)でタイトルは同一であるが、“**Closeness and Harmony, Most of the Time**” “**Are Parents Too Involved ?**” “**Money Is the Root of Most Conflict**” の各節は含まれていない。Arnett & Schwab(2013)による調査結果も含まれていないため、図表はなく、成人形成期の親子関係を表すマンガのみが載っている。

文献

- Amato, P. R. (2007). Life-span adjustment of children to their parents' divorce. In S.J. Ferguson (Ed.), *Shifting the center: Understanding contemporary families* (3rd ed., pp.567-588). New York: McGraw-Hill.
- Arnett, J. J. & Fishel, E. (2014). *Getting to 30: A parent's guide to the twenty something years*. New York: Workman.
- Arnett, J. J. & Schwab, J. (2012). *The Clark University Poll of Emerging Adults: Thriving, struggling, and hopeful*. Worcester, MA: Clark University. <<http://www.clarku.edu/clark-poll-emerging-adults/>>
- Arnett, J. J. & Schwab, J. (2013). *Parents and their grown kids: Harmony, support, and (occasional) conflict*. Worcester, MA: Clark University. <<http://www.clarku.edu/clark-poll-emerging-adults/>>
- Goldscheider, F. & Goldscheider, C. (1999). *The changing transition to adulthood: Leaving and returning home*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Jeynes, W. H. (2007). The impact of parental remarriage on children: A meta-analysis. *Marriage & Family Review*, 40 (4), 75-102.
- Larson, R. & Richards, M. H. (1994). *Divergent realities: The emotional lives of mothers, fathers, and adolescents*. New York, NY: Basic Books.
- Moore, S. & Cartwright, C. (2005). *Adolescents' and young adults' expectations of parental responsibilities in stepfamilies*. *Journal of Divorce & Remarriage*, 43, (1-2), 109-127.
- Taylor, P. & Keeter, S. (2010). Millennials: Confident. Connected. Opentochange. <<http://www.pewsocialtrends.org/files/2010/10/millennials-confident-connected-open-to-change.pdf>>